

企業大学訪問について

今回行われた東京訪問では、たくさんの学びがあり、自らの進路について考える機会となりました。

企業大学訪問では、国立感染症研究所の見学に行きました。私は医療関係の職業に就きたいと考えています。今回の訪問では、研究所での仕事から、研究員の方々が大学で何を学んできたかまで、たくさんのことを教えていただき、自らの将来について以前より明確に捉えられるようになったと思います。

研究所では、お忙しい中、私達に説明するためのスライドショーまで準備していただき、とても興味深いお話をしていただきました。国立感染症研究所村山庁舎には、人体や動物に生命に関わる重篤な症状を引き起こす「BSL4（エボラウイルス、マールブルグウイルスなど）」のウイルスの研究ができる国内に2つしかない施設があるそうです。加えて研究所では、感染症の流行を防ぐために、国内外の様々な機関と連携して対策を行っています。一昨年西アフリカでのエボラ出血熱の流行の際には、研究所の方々が調査などのためにシエラレオネなどの地に派遣されたそうです。流行している地域に赴くので、決して安全であるとは言えないでしょう。しかし、派遣されることになった方々は、苦言など全く言わず、流行を止める為に懸命に調査をしたそうです。私は、その方々の仕事への熱意に驚き、感動しました。

また、現代の情報社会では、感染症についてだけではなく、様々な分野についてインターネットに膨大な量の情報が溢れています。その情報の中には、全くのデマであったり、不用意に人を怖がらせたりしてしまうものがあるそうです。このお話で、メディアリテラシーの重要性を感じました。情報を流す方にはもちろん問題がありますが、その情報をまるまる信じ込んでしまう受け手の警戒心の無さと知識量の不足にも少なからず問題があると思います。インターネットだけではなく、マスメディアの報道にも、事実を述べてはいても誤解を生みやすいものもあるそうです。不用意に警戒することは逆に危険だそうで、その例としてワクチンについてお話をいただきました。最近では子宮頸がんワクチンの副作用について話題になり、接種を希望する人が激減しました。しかし、食物やハウスダストについてのアレルギーと同じように、ワクチンも体質によっては副作用が出やすいこともあり、すべての人が副作用なく受けられるという計算でワクチンは作っていない、何万人に1人は少々ひどい副作用が出る計算になっている、と。つまり、副作用に警戒してワクチンを受けない方が、副作用を想定に入れてワクチンを受けるよりもかえって危険であり、ぜひワクチンは受けて欲しいそうです。病気に対する警戒も、度が過ぎるとかえって自身の体にリスクを背負わせることになることになると聞き、研究所の方々が必死で研究してくださったことを無駄にしない為にも、確信性のない情報を流したり、情報を鵜呑みにしたりすることのないよう、受け手が正しい知識を持つことが大切だと思いました。

そして、研究所には、医学、理学など様々なことを学んできている方々がいるそうです。感染症研究、というと理系のイメージが強いですが、中には経済学を学び、統計を行っている人もいます。様々な得意分野を持つ人が、様々な形で活躍していることに、感染症研究がとても奥が深いものだと実感しました。

また、働いている方々にとつたアンケートの結果も見せていただきましたが、一般のサラリーマンに比べて仕事に対する満足度が非常に高く、感染症医療の最先端に立つて働く方々の誇りが

伝わってきました。

私は、医療に関わるには医者にならなければいけない、と思い込んでいました。しかし、今回の訪問で、医療に対するまた別の携わり方、またその仕事の奥深さについて知ることができました。今後の進路選択において、学んだことを有効に活用したいと思います。

今回、ご多用の中、私たちの訪問を受け入れ、有意義なお話を聞かせてくださった国立感染症研究所の方々に感謝しております。

東京大学オープンキャンパスについて

私は正直なところ、「東京大学はものすごく勉強のできる優秀な人の通う学校で、自分には縁がない」と思い込んでいたので、1日目の企業訪問に重点を置いて、2日目はざっくり様子を見てくるようなつもりでいました。しかし、キャンパス内を見て回るうちに、だんだんと興味がわいてきました。

私は東大生の印象として、「恐ろしいほどに勉強ができ、いつも本を読んだりして勉強している」というものが強く、それを想像して赤門をくぐりました。しかし実際はまったく違いました。入り口で総合案内をしたり、飲み物を売っていたりと、とてもエネルギッシュで輝いていました。ただ勉強ができるだけでなく、行事などにも真剣に取り組めるという東大生のエネルギーに圧倒されました。

そして、私が何よりも驚いたのが、ハンデを持った方々も生き生きとキャンパスライフを送っているということです。私自身、視覚にハンディキャップがあるので、母や同じように視覚障害を持った知人からも、「もしも猛勉強して成績を上げたとしても、難関大でやっていくのは難しいのではないか」と言われたことがあります。その言葉を受けて悩んでもいましたが、車椅子に乗ったり、白杖をついたりしているハンデを持ちながらも、最難関大学「東京大学」に入学し、さらにキャンパスライフを楽しんでいる方々に尊敬の念を覚えました。また、学校内での支援も充実しており、バリアフリー支援室という機関も設置されていました。形や大きさは違えど、自分と同じようにハンデを抱えた人たちにも等しく学ぶ機会が与えられることがとても嬉しいです。これから私も、進路についてより真剣に考えなければいけなくなりますが、その際に視覚のハンデを逃げ道にせず、自分にできることを精一杯やって、成績を上げられるよう頑張りたいと思います。

また、薬学部の説明会にも参加してきました。東京大学の薬学部では、薬学の基礎となる医学、化学などに目を向け、最初はその基礎を学んで固めるそうです。何事もまず基礎から、とはよく言いますが、それが日本最高峰の学力である東京大学でも体現されていると感じ、私は基礎を疎かにしていないだろうか、基礎を飛ばして応用に移行していないだろうか、と、日々の勉強法や様々な物事の練習法について考える機会となりました。

以前の私は、東京大学なんて名門大学、私にとっては程遠い存在だと思い込んでいました。ですが今は、東京大学に入学できる学力には到底及びませんが、以前よりも身近な大学にかんじられるようになりました。

ここで見たエネルギッシュな魅力を忘れず、私が第一志望とする大学に合格して夢を叶えられるよう、勉強をしっかりとしていきたいです。

2日間を通して

この2日間は、私にとってとても濃密な時間になりました。オープンキャンパスでは、ハンデを抱えていながらも努力でそれを補い、大学で生き生きと生活している方々を見て、私自身の進路を決めるとき、視力を理由に妥協したりはせず、そのためにも地道に勉強して成績を伸ばしていきたいと思いました。国立感染症研究所では、自らがやりたいことを仕事としている方々の熱い思いと誇りに触れ、自分の夢を叶えるためにも、目先の誘惑に惑わされず、しっかりと未来を見据えて努力したいと感じました。

正直、私の今の成績では目標を達成することはできません。しかし、今のままでいいとも思いません。目標に近づくための私にとって今最も有効な手段は「勉強すること」です。2日間学んだことを心に留め、道を見失いそうになったら思い出し、自分の目標を必ず達成できるように、日々精進していきたいです。

最後になりましたが、今回の研修を支えてくださった多くの方々にとっても感謝しております。

